

学位論文要約

大村はま話しことば学習指導実践体系の考察

－国語教科書及び指導資料等に見られる

話しことば教育観を手がかりとして－

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 教科教育学分野
国語文化教育学領域

D181175 伊 木 洋

1. 論文の構成	
序章 研究の目的と方法	1
第1節 研究の目的	2
第2節 研究の方法	3
第1章 大村はま話しことば学習指導に関する研究の成果と課題	5
第1節 大村はま話しことば学習指導研究の概観	6
第2節 大村はまが編集に関わった教科書及び資料に関する研究の概観	7
第3節 大村はま話しことば学習指導研究の成果と課題	7
第2章 昭和20年代の大村はま話しことば学習指導	9
第1節 戦後初期の大村はま話しことば学習指導の検討 －教育図書『国語中学校』の無署名教材を中心に－	10
第2節 学習記録「国語の技術 単元3話について」の検討	25
第3節 教育図書『中学総合国語』の話しことば学習指導の検討 －解説資料「単元と言語経験の表について」を中心に－	45
第4節 昭和20年代の大村はま話しことば学習指導の特徴	64
第3章 昭和30年代の大村はま話しことば学習指導	65
第1節 筑摩書房昭和31年度版『国語』及び『国語 学習指導の研究』の検討	66
第2節 1年生における話しことば学習指導の検討 ー単元「対話と問答」ー	73
第3節 2年生における話しことば学習指導の検討 ー単元「会話と討議」ー	131
第4節 3年生における話しことば学習指導の検討 ー単元「独話と討論」ー	230
第5節 昭和30年代の大村はま話しことば学習指導の特徴	287
第4章 昭和40年代の大村はま話しことば学習指導	288
第1節 教育出版『新版標準中学国語』の話しあい・討議を主とする単元の検討	289
第2節 単元「話し合ってみよう ことばの意味と使い方」の検討	301
第3節 独話の学習指導の検討 ー「話し出し」の指導に着目してー	313
第4節 昭和40年代の大村はま話しことば学習指導の特徴	326
第5章 大村はま話しことば学習指導実践体系の考察	327
第1節 大村はま話しことば学習指導はどのようなものであるのか	328
第2節 大村はま話しことば学習指導はどのようにして創りあげられていったのか	330
第3節 大村はま話しことば学習指導は実践の場に何を残したのか	332
第4節 大村はま話しことば学習指導実践体系	333
結章 研究の総括と展望	337
主要参考文献・引用文献	349
資料編	

2. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

大村はまは、話しことば学習指導の重要性を深く認識し、話しことばを基底にすえて、大村単

元学習と呼ばれる独創的で先駆的な国語教室を創造した。大村はま話しことば学習指導について、倉澤(1983)は「話しことばを媒介とした指導の理念と工夫において、大村はまが、その右に出る人がいないと言うことは定評のあるところ、この人の実践体系に多くを学ぶことによって、単に話し言葉教育の将来のためだけでなく、国語教室・教育全体の今後に力強い指針を与えるだろうという期待が誰にもある」(p. 445)と述べ、大村はま話しことば学習指導の実践体系に学ぶことの価値について言及している。野地(1993)は、大村が中学校国語科教育の実践面で開拓し創造し完成させた指導法に関することの第一に「話し合い・討議の学習指導のありかたを精密に討究され、中学生に話し合う力・討議する力を的確に会得させられたこと、さらにその指導方法の原理と方法を確かに開発されたこと」(p. 48)をあげ、大村によって中学校国語科教育における話し合い・討議の学習指導の原理と方法が開発されたことを価値づけている。大村による実践の記録は『大村はま国語教室』に結実しており、実践の場では大村はま国語教室における学習指導を礎として多くの学習指導が展開されてきた。本研究は、実践の場に多大な影響を及ぼしてきた大村はま話しことば学習指導を取り上げ、その実践体系を明らかにしようとするものである。

大村はま話しことば学習指導の実践体系を解明していくためには、大村はま話しことば学習指導はどういうものであるのかということをはっきりさせる必要がある。大村はま話しことば学習指導実践史研究においては、山元(1990)が昭和20年代における実践を考察している。また、甲斐(2003)や甲斐(2016)によって大村教室で学んだ昭和47(1972)年度入学生が記した3年間の学習記録に基づいた研究が行われ、「総合的な単元学習に話しことば学習指導を自在に融けこませ」た(山元, 1990, p. 50)時期の実践については解明されつつある。しかし、教科書の枠組みを超えた総合的な単元学習が実践される以前の昭和20年代から昭和40年代の大村はま話しことば学習指導については、資料の入手が困難なこともあり検討の余地があると考えられる。そこで、まず、昭和20年代、昭和30年代、昭和40年代の大村はま話しことば学習指導はどういうものであるのかということをはっきりと年代ごとに考察する。次に、各年代における大村の話しことば学習指導は密接につながり合って形成されていったと考えられることから、各年代における大村はま話しことば学習指導がどのようにして創りあげられていったのかということをはっきりと考察する。その上で、そうした実践を通して生み出されていった大村はま話しことば学習指導が実践の場に残したものは何かということをはっきりと考察し、大村はま話しことば学習指導の実践体系を明らかにする。

以上のことを踏まえ、本研究では以下の三点の研究課題を設定した。

- ① 昭和20年代、昭和30年代、昭和40年代の大村はま話しことば学習指導はどのようなものであるのかということをはっきりとする。
- ② 各年代の大村はま話しことば学習指導はどのようにして創りあげられたのかということをはっきりとする。
- ③ 大村はま話しことば学習指導が実践の場に何を残したのかということをはっきりとする。

(2) 研究の方法

本研究では、大村はま話しことば学習指導に関する各年代の資料として、『大村はま国語教室』とともに、大村が編集に関わった国語教科書の話しことば学習資料、教師用指導書、指導資料、研究会資料、大村教室で学んだ学習者の学習記録を収集し、これらの資料にみられる大村の話しことば教育観を手がかりとして分析・考察を進めるという方法をとる。

野地(1974)が指摘しているように話しことばは「表現の一回的発現性」(p. 154)をもつため話しことば学習指導に関する記録は残りにくい。そのため、話しことば学習指導において何が行われたかということをはっきりとすることは困難を伴う。大村はま話しことば学習指導においても、大村がどのような聞き手、話し手を育てることをめざし、何をどのように指導したかということをとらえようとするとき、入手することができるのは大村が自己の実践を記した『大村はま国語教室』を主とする限られた資料である。

教科書は複数で編集されるものであるため、大村が編集に関わった教科書の記述は大村が著者であることの確証が得られなければ大村個人の考えを表したものと考えることはできないが、教科書及び資料等の中には、大村が作成したことが明らかな学習資料や大村が執筆したことが確認できる学習指導の案などが記されており、大村の話しことば教育観をとらえていくことができるものがある。

具体的には、大村が編集に関わった教科書の中から、昭和 20 年代の教育図書発行『国語中学校』(1948)、教育図書発行『中学総合国語』(1951)、昭和 30 年代の筑摩書房発行『国語』(1956)、昭和 40 年代の教育出版発行『新版標準中学国語』(1972)を取り上げる。教科書及び指導資料等の中から、大村が作成、執筆したと考えられるがこれまであまり注目されることのなかった資料を取り上げて分析・考察する。こうした教科書及び資料等は、大村が自己の国語教室の実践をふまえて創りあげていった話しことば学習指導に対するそのときどきの考え方を一般化し、話しことば教材を通して全国の学習者や指導者に具体的に示したものである。また、大村教室の学習者が記述した学習記録を取り上げる。学習記録からは、学習者の側からみた大村はま話しことば学習指導をとらえていくことができると考える。

なお、本研究では鳴門教育大学附属図書館大村はま文庫所蔵の学習記録を取り上げる。学習記録は公開することを前提に作成されていないため、学習者の氏名はイニシャルとする。

3. 各章の概要

第1章 大村はま話しことば学習指導研究の成果と課題

第1章では、大村はま話しことば学習指導研究の成果と課題を検討した。実践を通して数多くの提案がなされた大村はま話しことば学習指導は質・量ともに高く評価され、実践や実践理論の研究に多大な影響を及ぼしてきた。これまでの大村はま話しことば学習指導に関する研究を通してその内実が明らかにされつつあるものの、大村が編集に関わった教科書の話しことば学習資料や大村教室で学んだ学習者が記した学習記録を取り上げて検討するという点においては十分であるとは言い難く、資料の入手が困難である昭和 20 年代から昭和 40 年代については検討の余地がある。そこで、本研究では大村が編集や作成に関わった昭和 20 年代、昭和 30 年代、昭和 40 年代の国語教科書、教師用指導書、指導資料、研究会資料、学習記録を取り上げ、そこにみられる大村の話しことば教育観を手がかりとして、大村はま話しことば学習指導はどのようなものであるのか(第一の研究課題)、大村はま話しことば学習指導はどのように創りあげられていったのか(第二の研究課題)、大村はま話しことば学習指導が実践の場に何を残したのか(第三の研究課題)ということ进行分析・考察し、大村はま話しことば学習指導実践体系を解明していくこととした。

第2章 昭和20年代の大村はま話しことば学習指導

第2章では、昭和20年代の大村はま話しことば学習指導の特徴を明らかにするため、教育図書『國語中学校』の無署名教材、教育図書『中学総合国語』及び指導資料、学習記録を取り上げ、分析・考察を行った。

昭和20年代の大村はま話しことば学習指導は、戦後の単元を中心とする言語活動を組織する方向の中でスタートした。教科書の学習資料に学習の手引きをつけ、話し合う言語活動を設定するという形がとられたが、戦後初期の『國語中学校』（1948）の無署名教材に見られるように、大村は限定的ではあったものの書くことの学習指導と関連させ、書くことの学習指導の教材の中に範例となる話し合いの場面を組み込むという方法を示した。学習者に具体的に話し合いのイメージを持たせるようくふうされており、ここには、大村の話しことば学習指導が昭和20年代の戦後初期の時点から、単なる知識として身につけるのではなく、実践的な話しことばの力を育成することを目指していたことが示されている。

大村が委員として編修に関わった『昭和26年（1951）改訂版中学校高等学校学習指導要領国語科編（試案）』（1951）には、「国語科の教育課程は、言語経験についての知識を授けるよりも、価値ある言語経験を豊かに与えるという方向を心がけている。」（p.4）と記されており、こうした方向性の中で大村の話しことば学習指導が形成されていったと考えられる。言語経験を通して話しことばの力を身につけるという方向性は、大村はま話しことば学習指導において一貫しており、学習記録「國語の技術 単元3話について」（1951）に示されているように、書くことの学習指導と関連させながら、実際に言語経験をさせることを通して話しことば学習指導が展開されている。その際、評価表を用いた学習指導が取り入れられ、互いに育て合う中で話しことば学習指導が展開されている。そこでは、他者からの評価を得て、また、他者の姿の中に自己の話しことばのありようを見つめ、自己の話しことばへの自覚を促していく方向性が示されている。『昭和26年（1951）改訂版中学校高等学校学習指導要領国語科編（試案）』には、「評価表の例」が示されており、学習指導要領の編修を通して評価に対する認識を深めていった大村が実践に生かしていったと考えられる。

『中学総合国語』（1951）では言語経験を通して話しことばの力を身につけさせるという方向性を重視しつつ、単元の中に話しことば学習指導を位置づけた単元が構成されている。学習者の実態に基づいて豊かな言語経験をさせるよう単元を構想することが目指されているが、大村が解説資料「単元と言語経験の表について」（1952）に記しているように、言語経験がかたよったりぬけおちたりすることのないよう「単元と言語経験の表」が作成され、1年間の学習指導全体を見通してバランスよく言語経験をさせることに目を向けて話しことば学習指導を組織していったと考えられる。昭和20年代、戦後初期の大村はま話しことば学習指導においては、書くことの学習指導の教材の中に範例となる話し合いの場面を組み込むという方法が提示されたが、無署名教材の一場面という限定的で恣意的なものであったと言える。『中学総合国語』においては価値ある話しことばの言語経験が年間を通して単元に位置づけられ、計画的で意図的な話しことば学習指導が組織されることとなっていったと考える。

第3章 昭和30年代の大村はま話しことば学習指導

第3章では、昭和30年代の大村はま話しことば学習指導の特徴を明らかにするため、大村が

執筆した昭和31年度版『国語』（1956）に基づく単元「対話と問答」、単元「会話と討議」、単元「独話と討論」の学習指導の学習指導の案と、その学習指導の案に基づく学習指導の実際について学習者の記した学習記録をもとに考察を行った。

昭和30年代における大村の話しことば学習指導は、西尾実が監修した教科書『国語』の編集に携わったことに大きな影響を受けていると考えられる。話しことばの未熟さや未発達が国民教育の課題として自覚されておらず、話しことばに関する教育が充実したものになっているとはいえないという話しことば学習指導に対する問題意識をもって、大村は教科書の指導書である『国語 学習指導の研究』の学習指導の案を担当したと考えられる。民主社会を形成していく担い手として話し合える人を育てるという自己の話しことば教育観のもと話しことばの学習指導の重要性を認識し、豊かな言語経験を年間計画の中にバランスよく位置づけることを試みていた大村であったが、西尾実監修の教科書『国語』の編集及び学習指導の案を執筆するという機会を通して、西尾による話しことばの形態にしたがって、系統性を考慮しつつ具体的な学習指導の案を構想し、実践していったと考えられる。

単元「対話と問答」、単元「会話と討議」、単元「独話と討論」の学習指導の案及び学習記録に記された実践を考察すると、学習者の実態をふまえつつ、実際に学習者一人一人の話しことばの生活の改善が目指されている点で一貫している。学習指導目標では、言語生活における「対話と問答」「会話と討議」「独話と討論」の重要性を理解することを土台とし、その方法と問題点を理解し、問題点の解決を目指して日常の話しことばの生活において話しことばの学習の場を見いだしていく主体的な態度の育成が目指されている。また、聞くこと、話すことの学習指導目標が示され、それぞれの目標が学習指導の案においてどのような活動の場面で評価できるのかということが各時間の学習指導の案において具体的に示されている。学習指導の案では、目標、活動、評価を一体のものとしてとらえ、学習指導を組織するという構造になっている。

学習指導の案及び実践では、学習者の話しことばの実態を起点として、自らの話しことばの問題点を見つめさせ、学習者の問題意識を喚起することから学習指導が始められている。教科書の学習資料を生かして、問題点の解決に向けて考えを深めさせながら、評価表を用いて自己の問題として話しことばの問題点と向き合っていくことができるよう学習にくふうがこらされている。評価表の活用は既に昭和20年代の話しことば学習指導においてなされており、そのねらいは、学習者がともに学びを創造していく中で、話しことばの具体的な観点に即して他者からの評価を得て、また、他者の姿の中に自己を問うことによって、自己の話しことばの自覚を深めていくことを促すことにあると考えられる。

第4章 昭和40年代の大村はま話しことば学習指導

第4章では、大村が編集に関わった教育出版発行『新版標準中学国語』（1972）及び指導資料「聞くこと話すことの指導はこのように―『新版標準中学国語』の教材研究―」（発行年無記載）教科書の発行に合わせて作成されたと考えられるため、推定1972-1974）を中心に昭和40年代の大村はま話しことば学習指導について考察を行った。

『新版標準中学国語』及び指導資料にみられる昭和40年代の学習指導では、話しことば学習指導は「話し合い・討議を主とする単元」の系列と「独話を主とする単元」の系列で構成され

ている。ここでは、国語教室において話しことば学習指導が形骸化しているという実情をふまえ、聞くことの重要性や話し合い・討議の重要性とむずかしさを深く認識して、読むことや書くことの学習指導との関連を図りつつ、国語科の学習内容を話題として学習者が本気になって考え、話し合い、発表し合う中で、話しことばの力を体得していく話しことば学習指導の一つのあり方が示されている。それまでの指導の成果が生かされ、具体的な言語活動を経験させ、評価表や録音機器を活用して自己の話しことばを見つめ、話しことばの自覚を促していくという指導が重視されている。

質疑力の指導に着目すると、昭和40年代の大村はま話しことば学習指導ではそれまでの話しことば学習指導の成果をふまえつつ、自ら問題を見だし主体的に思考していく力を育てるために、多様な質問のモデルを示すという量的な指導から、何が問題かを問う質問のモデルを示す質的な指導を重視する方向へと指導が深まっていった点に特徴を見出すことができる。

第5章 大村はま話しことば学習指導の実践体系の考察

第5章では、第2章から第4章の検討をもとに、大村はま話しことば学習指導の実践体系の解明を試みた。

第1節では、昭和20年代から昭和40年代の大村はま話しことば学習指導はどのようなものであるのかという第一の研究課題について考察した。

大村はま話しことば学習指導は、民主社会の形成者として不可欠な実践的な話しことばの力を育てるという一貫した目的・目標を軸に、各年代における実践と往還させながら大村が取り組んだ教科書の編集及び指導資料等の作成を一つの契機として、変化し、進展しながら形成されていったと考える。

昭和20年代、戦後初期の話しことば学習指導は、学習に話し合いを取り入れるために、国定教科書『中等国語』に見られるような教科書の学習資料に学習の手引きをつけ、主として読むことの学習指導と関連させて話し合う言語活動を設定するという形で始められた。そうした状況の中、大村が作成に関わった戦後初期の検定教科書、教育図書発行『国語中学校』（1948）の無署名教材の考察から明らかになったことは、大村が話しことば学習指導を書くことの学習指導と関連させ、書くことの学習指導の教材の中に話し合いの場面を組み込むという形で、話し合いの範例を示すという方法を提示していることである。ここには、限られた教材であり、書くことの学習指導の教材の中に話し合いの場面を組み込むという形ではあるものの、学習者が実際に話し合いを行っている具体的な場面を教材として示し、話し合いのイメージを持たせて話し合いの学習指導を展開する方向が示されている。

昭和20年代、大村が『国語中学校』の次に編修に携わった教育図書発行の国語教科書『中学総合国語』（1951）では、言語経験をさせることによって話しことばの学習指導を展開するという方向性は一層明確なものとなり、価値ある話しことばの言語経験をいかに豊かに単元の中に位置づけていくかということが重視されることとなった。指導書『中学総合国語 指導の研究 第一学年用全』（1952）の大村が執筆した解説資料「単元と言語経験の表について」の考察から明らかになったことは、言語経験がかたよったり抜け落ちたりすることのないよう大村が自己の実践をふまえて「単元と言語経験の表」を作成し、1年間の学習指導全体を見通してバランスよく言語経験をさせることができるよう話しことば学習指導を組織していることである。

昭和 20 年代、戦後初期の大村はま話しことば学習指導においては、書くことの学習指導の教材の中に範例となる話し合いの場面を組み込むという方法が提示されたが、無署名教材の一場面という限定的で恣意的なものであったと言える。『中学総合国語』においては価値ある話しことばの言語経験が年間を通して単元に位置づけられ、計画的で意図的な話しことば学習指導が組織されることとなっていたのである。

大村が編修に関わった昭和 30 年代の筑摩書房の教科書『国語』（1956）における話しことば学習指導の単元構成は、西尾（1947）による話しことばの形態にしたがって、1 年生「対話と問答」、2 年生「会話と討議」、3 年生「独話と討論」となっており、話しことば学習指導の系統性を重視している点に特徴がある。昭和 30 年代の「対話と問答」、「会話と討議」、「独話と討論」の学習指導の案及び学習記録による実践の考察から明らかになったことは、学習指導目標として話しことばに対する態度目標とともに、聞くこと、話すことの技能目標が分析的に示され、目標、活動、評価を一体のものとしてとらえ、評価表を効果的に活用した話しことば学習指導が組織されているということである。ここには、昭和 20 年代の豊かな言語経験をさせることそのものを重視した大村はま話しことば学習指導が、昭和 30 年代には言語活動を通して実践的な話しことばの力を育てる方向性を保ちつつ、どのような態度や技能を育てるのかという分析的、系統的な面を意識した話しことば学習指導の方向に進んでいったことが示されている。

大村が編集に関わった昭和 40 年代の教育出版発行『新版標準中学国語』（1972）及び大村が執筆した指導資料「聞くこと・話すことの指導はこのように―『新版標準中学国語』の教材研究―」では、昭和 40 年代の『新版標準中学国語』に見られる話しことば学習指導が、読むこと、書くことの学習指導と関連させ、「話し合い・討議を主とする単元」の系列と「独話を主とする単元」の系列で構成されていることが明らかになった。国語科の学習内容を話題として話し合い・討議をする力を育てることを中心とした学習指導になっており、独話の学習では発達段階をふまえ研究発表という言語活動が取り上げられている。昭和 30 年代の分析的、系統的な面を意識した話しことば学習指導から、学習者が国語科の学習内容について本気になって考え、話し合い、発表し合う中で、自己の話しことばをふりかえり、話し合いのしかたや研究発表のしかたなど生きた話しことばの力を体得していくという、国語科の話しことば学習指導として一つの典型的で現実的な形へと進んでいったと考える。大村は読むことの学習指導の教材を用いたことばの使い方の研究やことばに関する研究発表など、国語科の学習内容を話題とした話し合いの場面や研究発表の実際を教材化し、指導資料「聞くこと・話すことはこのように―『新版標準中学国語』の教材研究―」を作成して全国の指導者に向けて話しことば学習指導の一つのあり方を示そうとしたと考えられる。

以上のような昭和 20 年代から昭和 40 年代の形成過程を経て、大村はま話しことば学習指導は国語科における話しことば学習指導の一つのあり方として整理され、その後の教科書の枠組みを超えた総合的な国語科単元学習の中で話しことば学習指導を行う方向に進んでいったと考える。

以上の大村はま話しことば学習指導の形成過程を整理すれば次のようになる。

	年代	教科書	話しことば学習指導の特徴	
導入期	昭和 20 年代 戦後初期	『国語中学校』 (1947)教育図書	書くことの学習指導の教材の中に話し合いの場面を組み込むという形で、話し合いの指導を行う方法を提示した。	限定的 恣意的
拡大期	昭和 20 年代	『中学総合国語』 (1951)教育図書	豊かな話しことばの言語経験をさせることを重視し、年間を見通して単元に位置づけた。	計画的 意図的
深化期	昭和 30 年代	『国語』 (1956)筑摩書房	言語活動を通して話しことばに対するどのような態度や技能を育てるのかという能力を検討した単元を組織した。	分析的 系統的
集約期	昭和 40 年代	『新版標準中学国語』 (1972)教育出版	読むこと、書くことの学習指導と関連させ、学習者が国語科の学習内容を話題として本気になって考え、話し合い、発表し合う中で、話し合いのしかたや研究発表のしかたなど話しことばの力を体得できるよう単元を構想した。	典型的 現実的

第2節では大村はま話しことば学習指導がどのようにして創りあげられたのかという第二の研究課題について考察した。

昭和 20 年代、戦後初期の大村はま話しことば学習指導は、『昭和 22 年度（試案）学習指導要領国語科編』（1947）に示された「単元を中心とする言語活動の組織」を重視するという戦後の学習指導の方向にそって行われている。大村はま話しことば学習指導においては、実際に言語活動を行う学習の場は「実の場」と呼ばれて重視されている。本研究では、大村はま話しことば学習指導における「実の場」を「学習者にとってその活動を行う必然性や意味のある学習の場」と定義し、「実の場」を通して話しことば学習指導を行うことによって、国語教室における話しことば学習指導と実際の言語生活を結び、単なる知識としてではなく、実践的な話しことばの力を体得することが目指されたと考える。『国語中学校』（1948）に見られる戦後初期の大村はま話しことば学習指導における書くことの学習指導の教材の中に話し合いの範例を組み込むという方法は、「実の場」を通して話しことば学習指導を行うことによって国語教室と実際の言語生活を結び、実践的な話しことばの力を育てることを目指した大村の話しことば学習指導に対する考え方から生み出されたくふうであると考えられる。

昭和 20 年代に発行された『昭和 26 年（1951）改訂版中学校高等学校学習指導要領国語科編（試案）』（1951）には、「国語科の教育課程は、言語経験についての知識を授けるよりも、価値ある言語経験を豊かに与えるという方向を目がけている。」（p. 4）と明示されている。

この学習指導要領の編修の場に委員の一人として身を置いていた大村は、話しことば学習指導

に対する自らの考え方を、価値ある言語経験を豊かに与えていくという学習指導要領の方向におし進め、戦後初期の『國語中学校』に見られる限定的な話しことば学習指導から、『中学総合国語』(1951)の「単元と言語経験の表」及び『中学総合国語 指導の研究 第一学年用全』(1952)の解説資料「単元と言語経験の表について」に見られるような1年間の国語科学習指導全体を見過して意図的、計画的に言語経験をさせていく学習指導へと話しことば学習指導を進展させていったと考えられる。

昭和30年代における大村は話しことば学習指導には、西尾実監修の教科書『国語』(1956)及び学習指導の案を大村が担当した指導書『国語 学習指導の研究』の編集に大村が携わったことが大きな影響を及ぼしていると考えられる。大村の話しことば学習指導に対する考え方は、経験主義の学習指導に対する批判に応えようとする西尾の考え方をふまえ、言語活動を通して実践的な話しことばの力を育てる方向性を保ちつつ、系統性や能力の分析を十分に意識する方向へと進んでいったと考えられる。そうした大村の話しことば学習指導に対する考え方は、「対話と問答」、「会話と討議」、「独話と討論」という系統に即して態度及び技能目標を分析的に示し、目標、活動、評価を一体のものとしてとらえ、評価表を効果的に活用した話しことば学習指導の案に反映されていったと考えられる。大村は系統的な能力をふまえつつ、学習者の能力を把握して目標を設定し、話しことばの能力を育成していったと考えられる。評価表の活用は目標に対する評価を明確にしていくことにあつたが、大村は評価表の活用によって学習者がともに学びを創造していく中で、他者から具体的な観点に即した評価を得ることや他者の姿の中に自己を問うことを通して、自己の話しことばのありように気づかせ、話しことばの自覚を深めさせていったと考えられる。

また、西尾(1957)は、独話と討論について学習者の発達段階から本格的な学習は困難だが、その準備として学級や学年の全体を相手として独話的な活動や討論的な説得を行うことが適当であると指摘している。昭和30年代の独話と討論の学習記録(1957)によると、大村は文学を讀むことの学習指導と関連させ、独話の学習指導として学級においてグループで文学作品を研究し発表する活動を展開している。大村は昭和30年代のこうした実践を経て、昭和40年代に国語科における独話の学習指導として研究発表という言語活動を設定する方向性を明確に打ち出していったと考えられる。

昭和40年代には、大村が指導資料「聞くこと・話すことの指導はこのように—『新版標準中学国語』の教材研究—」(p.2)において指摘したように、全国の国語教室において話しことば学習指導が形骸化しているという実情があつた。話しことば学習指導の重要性と難しさを深く認識していた大村は、話しことば学習指導の形骸化という問題を乗り越えていくために、それまでの自己の実践をふまえて国語科における話しことば学習指導のあり方を整理し集約していったと考えられる。大村はこうした話しことば学習指導に対する考え方のもと、『新版標準中学国語』において国語科の学習内容を話題とした話し合いの場面や研究発表の実際を教材化するとともに、指導資料「聞くこと・話すことの指導はこのように—『新版標準中学国語』の教材研究—」の中でその学習指導のポイントをまとめ、全国の指導者に向けて話しことば学習指導の一つのあり方を示していったと考えられる。また、昭和40年代の大村は話しことば学習指導における質疑力の指導に着目すると、大村は自ら問題を見いだし主体的に思考していく力を育てるために、多様

な質問のモデルを示すという量的な指導から、何が問題かを問う質問のモデルを示す質的な指導を重視する方向へと指導を深めていったと考えられる。

昭和40年代における大村はま話しことば学習指導では、国語科の学習内容を話題として話し合いの場面を設定し、そこでなされる話し合いが深まっていくような教材を使った話しことば学習指導の一つのあり方が示され、その後の教科書の枠組みを超えた総合的な単元学習の中で話しことば学習指導を展開していく方向に進んでいったと考える。

第3節では、大村はま話しことば学習指導が実践の場に何を残したのかという、第三の研究課題を考察した。野地(1974)は国語科における話しことば学習指導の史的展開を示しており、野地による指摘をまとめれば以下ようになる。明治期の話し方カリキュラムにおいては、演説が重視されたが国語科の教育課程の中に話し方の教育内容はしっかりと位置づけられるところまではいかなかった。大正期の話し方カリキュラムでは、他教科に付帯して生かそうとする話し方教育の問題点が指摘され、話し方教育の独自性の上に指導を組織立てることが求められていった。昭和期(戦前)の話し方カリキュラムでは、聴き方・話し方が関連させて扱い話し方の教授段階が示されたが、明治大正期から続く発表を中心とする指導が行われ、戦時下の国民科話し方においては「ことばしつけ」が音声面から重視されていった。

野地の考察に示されているように、戦前の話しことば学習指導では発表を中心とする指導が行われ、しつけとして態度が重視される面があったが、戦後の話しことば学習指導においては、民主社会の形成に向けて話し合いの学習指導が重視されていった。こうした状況の中で、大村は戦後新制中学校において民主社会の形成者として不可欠な対話や話し合いをすることができる実践的な話しことばの力を育成することを目指していった。大村は戦前には見られなかった、学習者を必要感のある話しことばの学習の場(実の場)に立たせ、言語生活における話しことばの使用場面を教材として話し合いの指導を中心にすえた話しことば学習指導を実践し、中学校国語科における話しことば学習指導の一つのあり方を具体的に示していった。大村が実践を通して提案したことは、学習者に言語生活の中で話し聞き、話し合いを通して共にものごとを考えていくことの重要性を実感させ、実際に話し合いをすることができる力を育てることであり、学習者が本気になって話し合い思考していく中で、自己の話しことばのありように気づき、自覚を深めていく話しことば学習指導の一つのあり方であったと考える。

さらに、実践の場における話しことば学習指導の重要性と困難さを深く認識していた大村は、教科書や指導資料等の作成にあたって、自己の実践に基づいて学習指導の実際をエピソードのように記述していくことによって、話しことば学習指導の具体的なイメージを描き出し、実践の場に示そうとしたと考える。大村はまという一人の優れた実践者が何を願い、実際にどのような話しことば学習指導を行ったのかというエピソードによる記述は、実践の場で話しことば学習指導に取り組む指導者にとって、実践の具体的な姿やイメージを思い浮かべ、貴重な示唆を得るものとなったと考える。

第4節では、大村が編集や作成に関わった昭和20年代から昭和40年代までの国語教科書及び指導資料、学習記録の考察から導き出される大村はま話しことば学習指導の実践体系について、目的及び目標、内容、方法という観点から考察した。

大村はま話しことば学習指導の目的は、社会的存在として民主社会を形成していく担い手を

育てることにある。戦後の混乱の中、新しい時代の幸せを願い、新制中学校での教育に飛び込んでいった大村は、話しことば学習指導に並々ならぬ思いを抱いていた。民主社会では話し合いによって合意を形成し、ものごとを決定して進めていく。そのため民主社会を形成していく担い手にとって、話し合いを行う実践的な話しことばの力は必要不可欠な力となる。したがって、単に知識としてではなく、実際の言語生活において通じ合いを成立させる実践的な話しことばの力を育成することが、大村はま話しことば学習指導の目標とされたのである。大村は話しことばについて頭の中で理解していても、実際に話すことはむずかしいという現実をふまえて、話しことばの力は実際に使いながら身につけていくものであるととらえていたと考える。大村はま話しことば学習指導実践体系は、こうした話しことばに対する大村の考え方に基づいて構築されていたと考えられる。

実践的な話しことばの力を育成するためには、実際に話しことばの経験させる必要がある。昭和20年代、戦後初期には、限定的ではあったが書くことの教材の中に国語の学習についての話し合いの場面を組み込むという形で話しことばの場面が設定された。その後、言語生活の中に見られる価値ある言語経験を豊かにさせることが重視され、1年間の学習指導全体の中で多様な話しことばの経験をさせる場面が設定されていった。昭和30年代には、経験を通してどのような話しことばの力を育てるのかということが重視され、対話・問答、会話・討議、独話・討論そのものが話題として取り上げられ、対話・問答、会話・討議、独話・討論という話しことばの形態に即した場面が設定された。昭和40年代になると、読むこと、書くことの学習指導と関連させ、国語科の学習内容を話題として、学習者が本気になって話し合い、発表し合う場面が設定されていった。大村はま話しことば学習指導の内容に着目すると、それぞれの年代に特徴が見られるが、実際に話しことばの経験させるために、話しことばの使用場面を教材として学習者にとって必要感のある具体的な話題を用意し、話しことばの場面を設定して学習者を必要感のある話しことばの学習の場に立たせて話しことば学習指導が進められていると考える。

実際に話しことばの経験をさせるためには、実際の場面を設定し、必要感のある話題を用意した上で、どのような方法で学習指導を行うかということが重要となる。大村はま話しことば学習指導では、昭和20年代、戦後初期には、書くことの教材の一部ではあるものの学習者が話し合いをしているようすが範例として示され、その後、1年間の学習指導全体を通して、実際に話し合いを使って学習が進められていくようすが具体的に示されている。昭和30年代には、学習者自身に自らの対話・問答、会話・討議、独話・討論の問題点を考えさせた上で、教科書教材によって具体的な対話・問答、会話・討議、独話・討論の大切な点や範例を示し、実際に対話・問答、会話・討議、独話・討論を行わせ、評価表を使って評価させるという方法が示されている。昭和40年代になると、学習の手引きによって実際により話し合いの範例を示し、役割を分担して劇の台本のように読むことによって、よい話し合いのイメージをもたせた上で、手引きを傍らに置いて国語科の学習内容について実際に話し合いを行う形で話し合いの学習指導が進められている。実際に話し合いを行う過程においては、指導者が学習者の一人となってよい発言や質問などをやってみせる指導や録音してふりかえりながら適切な助言をする指導が行われている。大村はま話しことば学習指導では、範例を示して実際のイメージを持たせ、イメージを持って実際に経験させながら、話しことばの経験をする中で指導者がその場で実際にやってみせる方法や録

音を使ってふりかえりながら適切な助言をする方法が示されている。

本論文に言う「実践体系」とは、教育実践にそなわった構造（仕組み）のことである。大村はまの話しことば学習指導には、目的・目標、内容、方法について本章第3節までで論じたような特徴が見られる。それをふまえると、大村はま話しことば学習指導の教育実践には次のような構造（仕組み）がそなわっていると考える。

大村はま話しことば学習指導には「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手を育てる」という大きな目的・目標があった。これは本論文で考察してきたように昭和20年代の「導入期」から昭和40年代の「集約期」に至るまでの一貫した目的・目標である。このような目的・目標は大村の教育実践の根幹をなすものであった。同時に、戦後日本の教育実践がいずれも目指したものであったとすることができる。

「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手」を育てていくためには、「担い手」となるためのことばをどのようにすれば身につけることができるのかということ、学習者が具体的にイメージ化していくことができなければならない。大村の場合、話しことばの学習がその根幹であった。「担い手」となるための話しことばを学習者にイメージ化させていく方策として、大村はま話しことば学習指導では、戦後の各時期に次のようなことに焦点があてられていた。

導入期：書くことばの学習指導の教材の中に話し合いの場面を組み込む

拡大期：話しことばを使う経験をさせる単元を開拓する

深化期：話しことばを使う態度・技能を系統的に身につける

集約期：書きことばの学習と関連させながら本気になって話しことばを使う場と機会を設ける

それぞれの焦点に即して、学習者が「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手」としてどのようにふるまえばいいのかという具体的なイメージをもって実際の話しことば学習に取り組んでいくための教材にくふうが凝らされ、その多くはエピソードを記す形で作成された。話しことばはこうあるべきだということを理屈でわかっている、実際にことばとして使うことができなければ「担い手」となる実感を学習者が持つことはむずかしい。そのため多くの場合、「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手」として話しことばを使う場面を指導者である大村自身が創作し、それをモデルとして学習者は学習に取り組むことになる。

そのようなモデルとしての話しことばの使用場面を教材とした学習指導を行った場合、モデルをもとに自分たちが必要な場面で使うことができるかどうか重要な問題となる。モデルとしての話しことばの使用場面を教材とした学習指導の中で学習者自身が自らの話しことばの使用をふりかえり、より適切な使い方を自ら選び判断していかなければ、用意された具体的な使用場面を描いた教材は、反復し記憶する対象で終わってしまうことになる。そこで、大村はま話しことば学習指導においては、モデルとしての話しことばの使用場面を使いながら自分たちが行った話しことば実践をふりかえり、より効果的で生きたやりとりをするにはどうすればいいかということ、絶えず学習者同士や指導者と吟味し検討する機会が設けられている。ここに、大村はまの話しことば学習指導実践の重要な構造（仕組み）を指摘することができる。

このような、「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手」を育てるという確固たる目的・目標に基づいて、「民主社会」を形づくる「担い手」の理想的な姿を中学生がイメージでき

るように記述された教材をもとに、学習者が理想的な姿と現実の自分たちの話しことば実践とのギャップを見つめながら効果的で生きた話しことばを選択することを積み重ね、「民主社会」を形成する話しことばの「担い手」として自立することを目指すという構造を、大村はま話しことば学習指導に見ることができるのである。

結章 研究の総括と展望

結章では、本研究を総括し展望を述べた。

本研究の成果として、国語教科書及び指導資料等を取り上げ、大村による作成、執筆であることを確認し、資料の入手が困難であり検討の余地がある昭和20年代、昭和30年代、昭和40年代の大村はま話しことば学習指導がどのようなものなのか、どのように創られていったのか、実践の場に何を残したのかということ考察し、第5章で示したように、大村はま話しことば学習指導実践体系として、「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手」を育てるという確固たる目的・目標に基づいて、「民主社会」を形づくる「担い手」の理想的な姿を中学生がイメージできるように記述された教材をもとに、学習者が理想的な姿と現実の自分たちの話しことば実践とのギャップを見つめながら効果的で生きた話しことばを選択することを積み重ね、「民主社会」を形成する話しことばの「担い手」として自立することを目指すという構造が見られることを明らかにしたことがあげられる。

今後の展望として、大村はま話しことば学習指導実践史研究において、貴重な考察の手がかりとなる国語教科書及び指導資料等や学習記録をもとにさらなる分析を行っていく必要があると考えている。大村が実践提案を行った国語科実践研究発表会等の資料を取り上げて考察していく必要がある。昭和50年代以降の大村はま話しことば学習指導、さらには、昭和20年代以前の高等女学校における大村はま話しことば学習指導を対象として研究を進めていく必要があると考えている。

4. 主要引用文献・参考文献

- 芦田恵之助(1987)『芦田恵之助国語教育全集 12 易行道・教壇・教式編』明治図書
- 伊木洋(2019)「1970年代前期における大村はま話しことば学習指導の検討－質疑力の形成過程に着目して－」『国語科教育』第86集, pp.17-25
- 伊木洋(2019)「1970年代前期における大村はま話しことば学習指導の検討－話し合い・討議の学習指導に着目して－」『第137回全国大学国語教育学会発表要旨集』, pp.41-44
- 伊木洋(2020)『戦後初期の大村はま話しことば学習指導に関する一考察－教育図書発行『国語中学校』の無署名教材を中心に』広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第1号
- 幾田伸司(2013)「教科書教材史研究」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望 II』学芸図書, pp.177-184
- 池田悦子(1986)「昭和20年代における国語科単元学習論の考察－「単元論」の受容とその展開を中心に－」『教育学研究紀要』第32巻第二部, pp.67-72
- 石井庄司(1983)『近代国語教育論史』教育出版センター
- 石津正賢(2003)「大村はま国語教室における読書生活指導の研究－単元「知ろう 世界の子どもたち」を中心に」『国語科教育』第54集, pp.35-42

- 位藤紀美子監修(2014)『言語コミュニケーション能力を育てる 発達調査をふまえた国語教育実践の開発』世界思想社
- 井上一郎(2008)『国語力の基礎・基本シリーズ 話す力・聞く力の基礎・基本』明治図書
- 井上敏夫編(1981)『国語教育史資料 第二巻 教科書史』東京法令出版
- 井上敏夫(2009)『教科書を中心に見た国語教育史研究』溪水社
- 植西浩一(2015)『聴くことと対話の学習指導論』溪水社
- 上山伸幸 (2013)「話し合い学習指導に関する基礎的研究—話し合いを対象化する活動を取り入れた実践の分析を中心に—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第 62 号 pp.143-150
- 有働玲子(2011)『話しことば教育の実践に関する研究』風間書房
- 大村はま(1982)『大村はま国語教室 第 1 巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第 2 巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第 3 巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第 4 巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第 5 巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第 6 巻』筑摩書房
- 大村はま(1984)『大村はま国語教室 第 7 巻』筑摩書房
- 大村はま(1984)『大村はま国語教室 第 8 巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第 9 巻』筑摩書房
- 大村はま(1984)『大村はま国語教室 第 10 巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第 11 巻』筑摩書房
- 大村はま(1984)『大村はま国語教室 第 12 巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第 13 巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第 14 巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第 15 巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室 別巻』筑摩書房
- 大村はま(1985)『大村はま国語教室 資料篇 1』筑摩書房
- 大村はま(1985)『大村はま国語教室 資料篇 2』筑摩書房
- 大村はま(1985)『大村はま国語教室 資料篇 3』筑摩書房
- 大村はま(1985)『大村はま国語教室 資料篇 4』筑摩書房
- 大村はま(1985)『大村はま国語教室 資料篇 5』筑摩書房
- 大村はま(1966)『やさしい国語教室』共文社
- 大村はま(1968)『やさしい文章教室』共文社
- 大村はま(1969)『やさしい漢字教室』共文社
- 大村はま(1970)『国語教室の実際』共文社
- 大村はま(1981)『ことばの勉強会』共文社
- 大村はま(1981)『みんなの国語研究会』共文社
- 大村はま(1971)『小学漢和辞典』三省堂
- 大村はま(1971)『教えるということ』共文社

大村はま(1977)『続やさしい国語教室』共文社
大村はま(1977)『読書生活指導の実際』共文社
大村はま(1978)『国語教室おりおりの話』共文社
大村はま(1978)『正しい使い方がわかる 学習慣用語句辞典』三省堂
大村はま(1980)『国語教室通信』共文社
大村はま(1981)『大村はまの国語教室 1 ことばを豊かに』小学館
大村はま(1983)『大村はまの国語教室 2 さまざまのくふう』小学館
大村はま(1983)『日本語を豊かに』小学館
大村はま(1984)『大村はまの国語教室 3 学ぶということ』小学館
大村はま(1986)『教室をいきいきと 1』筑摩書房
大村はま(1986)『教室をいきいきと 2』筑摩書房
大村はま(1986)『教室をいきいきと 3』筑摩書房
大村はま(1986)『教えながら教えられながら』共文社
大村はま(1987)『授業を創る』国土社
大村はま(1988)『教室に魅力を』国土社
大村はま(1989)『大村はま授業の展開 1 世界を結ぶ』筑摩書房
大村はま(1990)『「日本一先生」は語る』国土社
大村はま(1990)『大村はま・教室で学ぶ』小学館
大村はま(1995)『日本の教師に伝えたいこと』筑摩書房
大村はま(1996)『新編教えるということ』筑摩書房
大村はま(1996)『新編教室をいきいきと 1・2・3』筑摩書房
大村はま(1998)『私が歩いた道』筑摩書房
大村はま(1999)『心のパン屋さん』筑摩書房
大村はま(2002)『大村はまの日本語教室 日本語を育てる』風濤社
大村はま(2002)『大村はまの日本語教室 日本語を鍛える』風濤社
大村はま(2003)『大村はまの日本語教室 日本語を味わう』風濤社
大村はま(2003)『教師 大村はま 9 6 歳の仕事』小学館
大村はま・荻谷剛彦・荻谷夏子(2003)『教えることの復権』筑摩書房
大村はま(2004)『大村はま講演集』風濤社
大村はま(2004)『灯し続けることば』小学館
大村はま(2004)『2 2 年目の返信』小学館
大村はま(2005)『大村はま自叙伝 学びひたりて』共文社
大村はま(2005)『大村はま国語教室の実際 上下』溪水社
大村はま(2005)『忘れえぬことば』小学館
大村はま白寿記念委員会(2004)『かけがえなき この教室に集う』小学館
大村はま・荻谷剛彦・荻谷夏子(2003)『教えることの復権』筑摩書房
長田友紀(2016)『国語教育における話し合い指導の研究－視覚情報化ツールによるコミュニケーション能力の拡張－』風間書房

- 甲斐伊織(2016)「大村はま国語教室における台本型手引きの変化からみる話し合い指導の系統－
 単元「クラスの歌を作る」の復元」『国語科教育』第 80 集
- 甲斐雄一郎(2003)「大村はま国語教室における学習の軌跡 1974 年度卒業生の学習記録に基づく
 調査研究」『人文科教育研究 30』
- 甲斐雄一郎(2008)『国語科の成立』東洋館出版社
- 甲斐雄一郎(2010)「大村単元学習指導の研究」日本国語教育学会『豊かな言語活動が拓く国語単
 元学習の創造 I 理論編』東洋館出版社, pp.236-246
- 苅谷夏子(2007)『優劣のかなたに 大村はま 60 のことば』小学館
- 苅谷夏子(2010)『評伝 大村はま ことばを育て 人を育て』小学館
- 河野順子(2009)『入門期のコミュニケーションの形成過程と言語発達－実践的実証的研究－』溪
 水社
- 河野智文(2001)「昭和二十年代における国語単元学習批判論の再検討」『兵庫教育大学研究紀要
 第 2 分冊言語系教育・社会系教育・芸術系教育』第 21 号, pp.25-35
- 唐澤富太郎 (1956)『教科書の歴史』創文社
- 教科書教育センター附属教科書図書館(1986)『教科書図書館蔵書目録 日本の教科書・教師用指
 導書 昭和 60 年 3 月現在』教科書研究センター
- 倉澤栄吉(1969)『話しことばとその教育』新光閣書店
- 倉澤栄吉・青年国語研究会(1970)『国語科対話の指導』新光閣書店
- 倉澤栄吉(1974)『聞くことの学習指導』明治図書
- 倉澤栄吉(1989)『倉澤栄吉国語教育全集 10 話しことばによる人間形成』角川書店
- 桑原隆(1998)『言語活動主義・言語生活主義の探求－西尾実国語教育論の展開と発展－』東洋館
 出版社
- 国立教育研究所附属教育図書館・教科書研究センター編(1986)『中学校国語科教科書内容索引
 上巻 ー昭和 24～61 年度ー』教科書研究センター
- 興水実(1948)『国語のコース・オブ・スタディ』非凡閣
- 斎藤美津子(1968)『話し方の科学』サイマル出版会
- 斎藤美津子(1972)『きき方の理論 続・話し言葉の科学』サイマル出版会
- 坂口京子(2009)『戦後新教育における経験主義国語教育の研究－経験主義国語教育観の摂取と実
 践的理解の過程』風間書房
- 坂本喜代子(2017)『対話的コミュニケーションが生まれる国語』溪水社
- 高橋俊三(1993)『対話能力を磨く－話し言葉の授業改革』明治図書
- 高橋俊三編(1996)『音声言語指導のアイデア集成 4』明治図書
- 高橋俊三(1998)『聴く力を鍛える授業』明治図書
- 高橋俊三編(1999)『音声言語指導大事典』明治図書
- 高森邦明(1979)『近代国語教育史』鳩の森書房
- 田近洵一(1999)『戦後国語教育問題史』大修館書店
- 田近洵一(2013)『現代国語教育史研究』富山房インターナショナル
- 田中瑩一編著(1994)『聞く力が育つ学習指導』東京書籍

- 谷木由利(2013a)「中学校における話すこと・聞くことの指導—大村はま国語教室に学んで—」
『第124回全国大学国語教育学会発表要旨集』 pp.328-331
- 谷木由利(2013b)「中学校における話すこと・聞くことの指導（その2）—大村はま国語教室に学んで—」『第125回全国大学国語教育学会発表要旨集』 pp.337-340
- 鳥飼玖美子・苅谷夏子・苅谷剛彦(2019)『ことばの教育を問いなおす』筑摩書房
- 中村敦雄(1998)『コミュニケーション意識を育てる発信する国語教室』明治図書
- 中村敦雄(2020)『国語科教育における能力主義の成立過程—興水実と近代化の精神、一九三〇—一九七七—』溪水社
- 永芳弘武・中村紀久二・加藤宗晴(1969)『教科書検定総覧 中学校篇』小宮山書店
- 檜原理恵子(2001)『話し言葉教育の研究—討議指導を中心に—』溪水社
- 西尾実(1947)『言葉とその文化』岩波書店
- 西尾実(1957)『国語教育学序説』筑摩書房
- 西尾実(1951)『国語教育学の構想』筑摩書房
- 西尾実(1975)『西尾実国語教育全集第4巻』教育出版
- 西原慶一(1965)『近代国語教育史』穂波出版社
- 野地潤家(1952)『話しことばの教育』広島プリント社
- 野地潤家(1974)『話しことば学習論』共文社, p.154
- 野地潤家(1974)『国語教育通史』共文社, pp.89-119
- 野地潤家(1980)『話しことば教育史研究』共文社
- 野地潤家(1992)「国語単元学習の歴史的展開」日本国語教育学会『豊かな言語活動が拓く国語単元学習の創造 I 理論編』東洋館出版社, pp.18-35
- 野地潤家(1993)『大村はま国語教室の探究』共文社, p.48
- 野地潤家(1996)『教育話法入門』明治図書
- 野地潤家(2011)『近代国語教育史研究』溪水社
- 橋本暢夫(2001)『大村はま「国語教室」に学ぶ—新しい創造のために—』溪水社
- 橋本暢夫(2009)『大村はま「国語教室の創造性」』溪水社
- 橋本暢夫(2013)『「大村はま国語教室全15巻別巻1」巻別内容総覧』溪水社
- 花田修一(1997)『生きる力を育む「話しことば」授業の改革』明治図書
- 浜本純逸(1997)『国語科新単元学習論』明治図書
- 浜本純逸(2011)『国語科教育総論』溪水社
- 坂東智子(2010)「個と共同体との関係性を築く古典学習指導—大村はまの単元学習指導「古典へのとびら」(昭和34)を中心に—」『国語科教育』第68集, pp.51-58
- 飛田隆(1983)『戦後国語教育史 上』教育出版センター
- 飛田多喜雄(1965)『国語教育方法論史』明治図書
- 飛田多喜雄(1988)『続・国語教育方法論史』明治図書
- 飛田多喜雄・野地潤家監修(1994)『国語教育基本論文集成第10巻 音声言語教育論 話し方・聞き方教育論』明治図書
- 福岡教育大学国語科・福岡教育大学附属(福岡・久留米・小倉)中学校(1997)『共生時代の対話

- 能力を育てる国語教育』明治図書
- 藤森裕治(1995)『対話的コミュニケーションの指導―話し合い』における「感性のレトリック」』
明治図書
- 藤森裕治(2002)「話すこと・聞くことの学習指導目標設定に関する研究の成果と展望」全国大学
国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書, pp.86-95
- 古田拓(1952)『聞くことの教育』習文社
- 古田拓(1952)『聞くこと』福村書店
- 古田拓(1966)『教師の話術』共文社
- ボルノー, 森田孝訳(1969)『言語と教育』川島書店
- 前田眞澄(2004)『話しことば教育実践学の構築』溪水社
- 前田眞澄(2015)「大村はま氏の話しことば学習論―『やさしい国語教室』を手がかりにして」『国
語教育学研究の創成と展開』編集委員会編『国語教育学研究の創成と展開』溪水社
- 増田信一(1994)『音声言語教育実践史研究』学芸図書, p.195
- 三浦和尚(2002)『「話す・聞く」の実践学』三省堂
- 村松賢一(2001)『対話能力を育む話すこと・聞くことの学習―理論と実践』明治図書
- 森美智代(2011)『実践＝教育思想の構築―話すこと・聞くこと教育の現象学』溪水社
- 森久保安美編(1989)『話しことば教育の復興1 話しことば教育のプログラム』明治図書
- 森久保安美編(1989)『話しことば教育の復興2 話しことばが育つ学級』明治図書
- 森久保安美編(1989)『話しことば教育の復興3 話しことばを磨く実践』明治図書
- 森久保安美(1996)『聞く力を育て生かす国語教室』明治図書
- 森久保安美(1997)『話しことば教育の実際―国語教室に魅力を一』東洋館出版社
- 文部省(1947)『昭和二十二年度(試案)学習指導要領国語科編』中等学校教科書株式会社
- 文部省(1951)『昭和二十六年改訂版小学校学習指導要領国語科編(試案)』中央書籍株式会社
- 文部省(1947)『昭和二十六年(一九五一)改訂版中学校高等学校学習指導要領国語科編(試案)』
北陸教育書籍株式会社
- 安直哉(1996)『聞くことと話すことの教育学―国語教育基礎論』東洋館出版社
- 安居總子・東京中学校青年国語研究会編(1994)『中学校の表現指導 聞き手話し手を育てる』東
洋館出版社
- 安居總子・西田拓郎(1999)『単元学習によるコミュニケーション教育』明治図書
- 山口喜一郎(1951)『話言葉とその教育』刀江書院
- 山元悦子(1989)「昭和二〇年代中学校国語科単元学習の考察―教科書の単元編成の実態を中心に
―」『国語科教育』第36集, pp.155-162
- 山元悦子(1990)「大村はま話しことば学習指導実践の考察―昭和20年代における実践の位置と
意義」『教育学研究紀要第2部第36巻』, pp.50-55
- 山元悦子(1991)「昭和20年代における話しことば学習論の開拓」『広島大学教育学部紀要』第2
部第39号 pp.39-49
- 山元悦子(1991)「教科書にみる経験主義単元学習―総合教科書(昭和二七年度)の分析を通して
―」『国語科教育』第38号, pp.115-122

- 山元悦子(1991)「戦後国語科教育における「単元・単元学習」概念の検討―その史的変容を中心に―」『広島大学教育学部紀要第2部』第40号, pp.19-27
- 山元悦子(1991)「昭和二十年代中学校国語科単元学習の考察(4)―「言語編」・「文学編」二分冊期の教科書単元の分析を通して―」『国語教育研究』第33号, pp.131-150
- 山元悦子(2000)「大村はま国語科単元学習実践の研究―昭和二〇年代初期の実践を中心に―」『福岡教育大学紀要第1分冊文科編』第49号, pp.1-15
- 山元悦子(2016)『発達モデルに依拠した言語コミュニケーション能力育成のための実践開発と評価』溪水社
- 吉田裕久(2000)「国語単元学習構想・成立の条件―大村はま国語単元学習を通して―」『国語教育研究』第43号, pp.1-11
- 吉田裕久(2001)『戦後初期国語教科書史研究―墨ぬり・暫定・国定・検定―』風間書房, pp.464-502
- 吉田裕久(2002)「話すこと・聞くこと」の教育研究史の概観と本章の課題」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』明治図書, pp.80-85
- 若木常佳(2001)『中学校国語 話し合う力を育てる授業の実際―系統性を意識した三年間―』溪水社
- 若木常佳(2011)『話す・聞く能力育成に関する国語科学習指導の研究』風間書房
- 若木常佳(2016)『大村はまの「学習の手びき」についての研究―授業における個性化と個別化の実現―』風間書房

国語教科書及び指導資料等

- 教育文化研究会(1948)『国語中学校 第一学年用三』教育図書
- 教育文化研究会(1949)『国語中学校 第二学年用二』教育図書
- 教育文化研究会(1951)『中学総合国語一』教育図書
- 教育文化研究会(1951)『中学総合国語三』教育図書
- 教育文化研究会(1952)『中学総合国語 指導の研究第一学年用全』教育図書
- 西尾実編著(1956)『国語 一上』筑摩書房
- 西尾実編著(1957)『国語 学習指導の研究 一上』筑摩書房
- 西尾実編著(1956)『国語 二上』筑摩書房
- 西尾実編著(1957)『国語 学習指導の研究 二上』筑摩書房
- 西尾実編著(1956)『国語 三上』筑摩書房
- 西尾実編著(1957)『国語 学習指導の研究 三上』筑摩書房
- 西尾実監修(1972)『新版標準中学国語一』教育出版
- 西尾実監修(1972)『新版標準中学国語二』教育出版
- 西尾実監修(1972)『新版標準中学国語三』教育出版
- 教育出版編集部(発行年無記載)『新版標準中学国語一教師用指導書』教育出版
- 大村はま(発行年無記推定 1972-1974)「聞くこと・話すことの指導はこのように―『新版標準中学国語』の教材研究―」教育出版

国語学習記録

S・H(1949)「単元学習帳 級雑誌の作り方」目黒第八中学校 2年 A組 鳴門教育大学附属図書館大村はま文庫所蔵

M・S(1951)「国語の技術 単元 3話について」紅葉川中学校 1年 1組 鳴門教育大学附属図書館大村はま文庫所蔵

H・W(1957)「対話と問答」文海中学校 1年 B組鳴門教育大学附属図書館大村はま文庫所蔵

M・N(1958)「会話と討議」文海中学校 2年 A組鳴門教育大学附属図書館大村はま文庫所蔵

E・K(1958)「国語 会話と討議」文海中学校 2年 D組 鳴門教育大学附属図書館大村はま文庫所蔵

E・K(1959)「国語 読みもの 独話と討論」文海中学校 3年 A組 鳴門教育大学附属図書館大村はま文庫所蔵

K・Y(1959)「独話と討論 外国文学から」文海中学校 3年 A組 鳴門教育大学附属図書館大村はま文庫所蔵